

『世界少年少女文学全集』 「古事記物語」の位相

―再話された日本の神話の考察―

市瀬 雅之

はじめに

一九五〇年から六〇年は、少年少女向けの文学全集が数多く出版された。その中でも創元社の『世界少年少女文学全集』は良書とされる(1)。一九五三年(昭和二十八)から五六年(昭和三十一年)の四年間に五十巻が刊行され、第Ⅱ部として十八巻が加えられている(2)。日本の作品は、

『日本編1 日本童話集』28

坪田譲治著(「つるの恩がえし」「うぐいすのほげきょう」「みそさざい」ほか七十一話)一九五四年(昭和二十九)八月。

『日本編2 日本古典文学集』29

林房雄・川端康成・片桐顕智・中村正爾・高木卓・堀尾勉・北村寿夫訳(「古事記物語」「竹取物語」「今昔物語」「堤中納言物語」「宇治拾遺物語」「義経記」「おとぎ草子」「狂言」「雨月物語」)一九五五年(昭和三十〇)二月。

『日本編3 文芸童話集』30

森鷗外ほか十六名代表作(「山椒大夫」森鷗外・「耳なし芳一の話」小泉八雲(光吉夏彌訳)・「おんどのりの冒険」島崎藤村ほか三十三話)一九五三年(昭和二十八)九月。

『日本編4 日本古典文学集(続)』44

中村正爾・富倉徳次郎・井元農一・高木卓・杉浦久英・野上彰・林房雄訳(「落窪物語」「平家物語」「中世説話物語」「曾我物語」「西鶴諸国話」「東海道中膝栗毛」「弓張月物語」)一九五六年(昭和三十一年)五月。

『日本編5 現代童話集』45

小川未明・坪田譲治・浜田広介・塚原健二郎・青木茂ほか二十一名代表作品(「大万化狐」青木茂・「十二歳の半年」北畠八穂ほか三十三話)一九五六年(昭和三十一年)三月。
の四冊が編まれ、第二部として、

『現代少年少女小説集』13

吉屋信子・川端康成・阿部知二(「花物語」「万葉姉妹」「新聞小僧」)一九五八年(昭和三十三年)三月。

の一冊が加えられた。林房雄(3)の執筆した「古事記物語」(以下、「古事記物語」と称す)は、先に刊行された第二十九巻のはじめに収められる。本稿は、「林古事記物語」を読むことで、一九五〇年代に、児童文学として再話された日本の神話の在り方を考察する一助としたい。

一、「解説」の考察

はじめに、巻末の「解説」から、作者の執筆姿勢を確認する。便宜的に二分すると、前半は次のように記されている。

古事記は、日本の美しい神話であり、日本人の手でさいしよに書かれた歴史である。

これを現代語になおして、少年少女のための物語をつくることは、「旧約聖書」の場合と同じように、たいへんむずかしい。このむずかしいしごとを、今から三十年ほどまえ、わたしがまだ中学生であったころ、鈴木三重吉氏が有名な「古事記物語」を書きあげた。鈴木氏の

しごとはりっぱである。

この全集に「古事記」を入れるなら、鈴木氏の「古事記物語」をそのままおさめたほうがいい、とわたしは編集部にすすめたのであるが、編集部は「すべて新しく書きおろしたものをのせるという方針であるから」と言って、どうしても、わたしに書けという。

わたしは、ことわりきれなくなつて、筆をとり「古事記」の中の、もつとも神話的部分である「神武天皇の東征」までを書きあげた。

『古事記』は、「日本の美しい神話」であり、日本人の手で書かれた「歴史」と位置づける。「鈴木氏のしごとはりっぱである」と評価した『古事記物語』（以下、「鈴木古事記物語」と称す）（4）は、『古事記』を、

（前略）「古事記」が最もおごそかに告げてゐることの第一は、われ／＼日本人は、その国民的生活の最初の出立から、天皇と、天皇の位と、すべての祖先とを、いかに絶対の神聖として貴んで来たか、及びそれと一しよにすべての天皇が根本の御責任として、人民の進歩と幸福とに向つて、それ／＼いかに大なる努力を拂われたかの事実である。

と記すが、「林古事記物語」はここまで天皇の存在を強調しない。新たな書き下ろしには、戦後という時代に応じた読み方が求められている。

「少年少女のための物語をつくる」との表現は、児童文学としての再話、直ちに古典作品の通釈にあたらぬことを示す。読者にあわせた解説や表現が求められるためである。

後半は、次のように記される。

ふりかえつてみて、「三重吉古事記」の上に、新しいものをつくくわえたとは思えない。

神々と天皇の物語であるから、原文は荘重な敬語体で書かれている。

三重吉氏が敬語体で訳しているのは正しい。しかし、わたしは、敬語

をほとんどはぶき、また三重吉氏がつけくわえた説明句もできるだけとのぞいた。つまり、「古事記」をできるかぎりはだかのすがたにして投げだすことをこころみたものであるが、それが新しいとはかならずしも、言えないだろう。「三重吉古事記」よりも、わかりにくくなつているところもあるかもしれない。

ものたりない読者諸君は、鈴木三重吉の「古事記物語」を読み、さらにすすんで、「古事記」の原典を読んできたきたい。「古事記」のおもしろさは、なんといつても原典の中にある。

いい解説書がたくさん出ているから、高校生諸君なら、「古事記」は楽に読める。解説書の中でいちばんおもしろいのは、本居宣長の「古事記伝」である。（林 房雄）

「『三重吉古事記』の上に、新しいものをつけくわえたとは思えない」と記すが、『赤い鳥』に連載され、単行本にまとめられた「鈴木古事記物語」と、全集の中に収める一作品として書き下ろされた「林古事記物語」を、一様に比較することは難しい。「鈴木古事記物語」が敬語体で記されているのは、「神々と天皇の物語であるから」と説く。それを正しいと肯定している。ただし、自身の執筆には「敬語体」をほとんど使用しなかつたと断る。「三重吉がつけくわえた説明句もできるだけとのぞいた」、或いは「できるかぎりはだかのすがたにして投げだすことをこころみられた」との表現からは、『古事記』を簡素に再話しようとする姿勢がうかがわれる。「わかりにくくなつているところもあるかもしれない」との記述からは、説明を省いた再話の難しい様子が垣間見られる。

物足りない読者には「鈴木古事記物語」を読むこと、『古事記』を読むことが勧められている。「少年少女」という読者の先には、「高校生」の存在が見据えられてもいる（5）。「解説書の中でいちばんおもしろいのは、本居宣長の「古事記伝」である」との発言には、再話が『古事記』の

読解に続いていることを示唆する。

児童文学として再話された日本の神話が、古典文学の読解へと続いてゆく理解は、今日の小・中学校の国語教育が求める「伝統的な言語文化」の学習にも求められている(6)。

ただし、児童文学として再話された日本の神話を俯瞰すると、作者の創意によって押し広げられた作品世界が存在することが重視される。それが児童文学の大きな特徴のひとつとなっているからである。再話のすべてが、古典文学としての読解ばかりを志向していないところに注意を要する(7)。

そのような中で「林古事記物語」には、古典文学の読解へと続いてゆくことが期されている。

二、小見出しへの考察

「林古事記物語」は、いくつかの小見出しによって物語を区切っている。

「鈴木古事記物語」のそれと比較してみよう。

「鈴木古事記物語」(上巻) 「林古事記物語」

女神の死一〜三 国うみ

黄泉の国

阿波岐原のみそぎ

天の岩屋一〜二 アメノイワト

八俣の大蛇 八またのおろち

むかでの室、蛇の室一〜四 オオクニヌシノカミ

雉のお使一〜二 高天の原の使者

笠沙の宮一〜二 天孫降臨

満潮の玉 干潮の玉一〜三 海幸山幸

八咫鳥 神武東征

赤楯、黒楯

唾の皇子(下巻略)

「鈴木古事記物語」が「女神の死」にまとめている内容を、「林古事記物語」は、はじめに「国生み」と位置づける。「イザナギノカミ」が「イザナミノカミ」を訪ねる「黄泉の国」を分立させ、「イザナギノカミ」がもとの国へ戻った後を「阿波岐原のみそぎ」と題している。異なる世界を区分して、物語の展開を示す。『古事記』が「天の岩屋の戸を開きて」と記す内容を、「鈴木古事記物語」が「天の岩屋」と題せば、「林古事記物語」は「屋」を省いて「戸」を加筆し、カタカナで「アメノイワト」と記す。「八俣の大蛇」は、ひらがなを用いて、読み方への配慮を加えている。「むかでの室、蛇の室」に対しては、物語の中心をなす「オオクニヌシノカミ」を選択している。「雉のお使」は、「高天の原」からの「使者」であることを示し、「笠沙の宮」は「天孫」として「ニニギノミコト」が高天から降り立つ先を優先している。「鈴木古事記物語」が、物語の中から、印象に残る表現を選んでの対し、「林古事記物語」は、読みにくい漢字はひらがなに改め、話の展開を優先した様子が認められる。

もつとも注目されるのは、「鈴木古事記物語」が「満潮の玉 干潮の玉」と題しているところを、「林古事記物語」が「海幸山幸」と記していることであろう。本文に留意すると、「鈴木古事記物語」は、

三人の御兄弟は間もなく大きな若い人におなりになりました。その中でお兄さまの火照命は、海で漁をなさるのが大変にお上手で、いつもいろんな大きな魚や小さな魚を沢山釣ってお帰りになりました。末の弟さまの火遠理命は、これは又、山で猟をなさるのがそれは〜お得意で、しじゅういろんな鳥や獣をどつさり捕ってお帰りになりました。

と、『古事記』が記すように、「火照命」と「火遠理命」の名を用いてい

る。以下は「弟の命」と「お兄さま」と記している。これに対して「林古事記物語」は、

三人の兄弟のうち、上の兄のホデリノミコトは、海の漁がじょうずで、いろいろなさをたくさんとってくるので海幸彦と呼ばれ、末の弟のホオリノミコトは、山の猟がじょうずで、いろいろなけだものをたくさんとってくるので山幸彦と呼ばれた。

と、『古事記』の記さない「海幸彦」と「山幸彦」を記しているところに特徴が認められる。

『日本書紀』（8）巻二十第十段正文には、

兄火闌降命自づからに海幸有り、幸、此には左知と云ふ。弟彦火火出見尊自づからに山幸有り。

とあり、一書第三に、

一書に曰く、兄火酢芹命能く海幸を得。故、海幸彦と号す。弟彦火火出見尊能く山幸を得。故、山幸彦と号す。

と、名としての使用が認められる。「林古事記物語」が、『日本書紀』から引用していないことは、「海幸彦」を「火闌降命（火酢芹命）」とせず「ホデリノミコト」と記し、山幸彦を「彦火火出見尊」とせず「ホオリノミコト」と記すところに確認することができる。

同話は、第四期国定国語教科書「小学国語読本巻五」（一九三五・昭和十年）に「二つの玉」と題され、第五期国定国語教科書「初等科国語一」（一九四七・昭和十七年）に「つりばりの行くへ」と題して掲載されている。神名は「火照命」と「火遠理命」、「ほでりの命」と「ほをりの命」を用い、「海幸彦」「山幸彦」の使用は認められない。『古事記』が再話されている。

大正時代まで遡ると、『海幸山幸』をタイトルにしている文献は、巖谷小波編の模範童話文庫に『海幸山幸』（一九二六・大正十五年）の刊行が認

められる（9）。その書きはじめが、

神武天皇のおちい様にあたるのが、山幸彦であります。山幸彦と海幸彦とは元々御兄弟の間柄でありましたが、なぜか大変に仲が悪くて、其ために山幸彦は、兄の海幸彦から難題を持ちかけられ、その結果龍宮へいらしつて、大層都合のよいことになりました。

と、「山幸命」と「海幸命」を記している。神名は、『古事記』に準じて「火折」と「火照」が用いられている。『古事記』と『日本書紀』の内容が混在しているところに特徴が認められる。

これが昭和に入ると、例えば、日本児童文庫として刊行された喜田貞吉の『日本歴史物語（上）』（一九二八・昭和三年）（10）が「山幸彦と海幸彦」と題し、

瓊瓊杵尊のお子の火闌降命は、『海幸彦』と申して、釣り針を以て海で魚をお捕りになる。又、その御弟の彦火火出見尊は、『山幸彦』と申して、弓矢をもつて山で鳥や獣をお獲りになる。

と記している。また、大木雄二の『日本神話』（一九三八・昭和一三年）（11）には「海幸・山幸」と題して、

瓊瓊杵尊の御子さまは、まもなく大きく立派になりました。

いちばんお兄さま火闌降命は、海の漁をなさるのがお上手で、毎日たくさんの魚を釣っていらつしやるので、海幸彦とお名前がつきました。末の彦火火出見尊は、山へお出かけになり、木の根、岩かどをお歩きになつて、獣や鳥をとつておいでになりました。それで山幸彦といふお名前と呼ばれるやうになりました。

とある。いずれも「火闌降命」「彦火火出見尊」或いは、「火闌命」「彦火火出見尊」と記す神名から、『日本書紀』を念頭に置いて再話されている様子が確認される。『古事記』と『日本書紀』の内容は、類和として区別されている。

ところが、戦後、世界名作童話全集に書き下ろした大木『日本神話 いなばの白うさぎ』（一九五二・昭和二十六年）（12）には、「海さち山さち」と題して、

火遠理命は、かりがすきでありました。ゆみ矢をもつて、まい日、山へでかけました。雨の日も、風の日も、みことはでかけていききました。けものや小鳥が、おもしろいほどたくさんとれて、いつもたいりようでありました。

そこで、人々は、みことのことを、山のさちひことよびました。山のさいわいのある男というみです。みことには、にいさんがありました。火照命といって、海のりようがすきなにいさんでありました。にいさんは、まい日、つりざおをかついで、海へでかけます。にいさんは、つりがじょうずで、いつも、さかなをたくさんつりあげるのです。人々は、海のさちひことよびました。海のさいわいのある男というみです。

と、神名が『古事記』と重ね合わせられていることが留意される。「林古事記物語」は、この後に出版された作品となる。

更に詳しく調べてみる必要があることだが、大正期には「鈴木古事記物語」のように、『古事記』を意識した再話も存在する。しかし、以後に刊行された『海幸山幸』には、『古事記』と『日本書紀』の区別が認められない。

これが昭和に入ると「海幸山幸」と題された再話は、『日本書紀』を念頭に置く様子が、神名に見出される。国定教科書に掲載された「二つの玉」や「つりばりの行くへ」は、神名から『古事記』を再話し、「海幸彦」や「山幸彦」の名を用いない。『古事記』と『日本書紀』の内容は、類和として区別されている。

戦後になって再び、『古事記』と『日本書紀』の内容を混在させる状況

が見出されるのである。「林古事記物語」は、先に刊行された『日本神話 いなばの白うさぎ』の影響を受けていると考えられなくもないが、後述するように「クシイナダヒメ」「ワニザメ」の表現と理解は一致しない。分けて考えるべきであろう。

三、「国うみ」への考察

本文の中から、「国生み」を読みながら、「林古事記物語」の特徴を探る。

『古事記』（13）は、冒頭部を次のように記す（再話と比較するため、訓読文を用いる）。

天地初めて発れし時に、高天の原に成りし神の名は、天之御中主神。次に、高御産巢日神。次に、神産巢日神。此の三柱の神は、並に独神と成り坐して、身を隠しき。

これを「鈴木古事記物語」は、

世界ができたそも／＼のはじめ、まず天と地とが出来上りますと、それと一しよに、われ／＼日本人のいばん御先祖の、天御中主神と仰る神さまが、天の上の高天原というところへお生れになりました。

そのつぎには高皇産霊神、神産霊神のお二方がお生まれになりました。と再話した。「天地初めて発けし時」を「世界ができたそも／＼のはじめ」と位置づける。そこに存在する「天御中主神」等を「われ／＼日本人のいばん御先祖」と記して、世界の誕生と共に、日本人の起源とする。「敬語体」が尊う姿勢を表している。

「林古事記物語」はこれを、

天地がはじめてできたとき、雲の上の高天の原に生まれた神の名は、アメノミナカヌシノカミ。つづいて生まれたのは、タカミムスビノカミとカミムスビノカミであった。

と、解釈を加えることもなく、敬語表現を用いることもなく記す。神名は表記をカタカナに改め、漢字から連想される意味には立ち入らない姿勢を示す。簡潔に「高天の原」が「雲の上」にあるとの理解だけを補足している。

「鈴木古事記物語」と比較して、「林古事記物語」の特徴をひとつあげると、

『古事記』 鈴木『古事記物語』（上巻） 林『古事記物語』

天の沼矛 りっぱな矛 天のぬぼこ

天の浮き橋 天の浮き橋 天の浮き橋

淤能碁呂島 一つの小さな島 おのころ島

天の御柱 (記述なし) 天のみはしら

八尋殿 御殿 八ひろ殿

と、「鈴木古事記物語」が神話独自の表現をわかりやすく書き改めているのに対して、「林古事記物語」は『古事記』の表現のままに用いる傾向が強い。その使用は、「天のぬぼこというりっぱなほこ」「天の浮き橋という雲の中に浮いた橋」「おのころ島という小さな島」「天のみはしらという高い柱」「八ひろ殿というみごとな御殿」と、短い修飾句を添えて、理解への配慮が示される(14)。

「鈴木古事記物語」が、伊邪那岐神と伊邪那美神が生み出す神々を、(前略)お二人は、今度は大ぜいの神さまをお生みになりました。それと一しよに、風の神や、海の神や、山の神や、野の神、川の神、火の神をお生みになりました。

と記すところを、

シナツヒコという風の神

ククノチという木の神

オオヤマツミという山の神

カヤヌヒメという野の神

ヒノカグツチという火の神

と、具体的な神名までを記している。「鈴木古事記物語」が児童にもわかる表現に改め、細やかに解説を加えたのに対して、「林古事記物語」は『古事記』を、最小限の加筆や変更で再話する努力が示されている。「鈴木古事記物語」が「序」に「小さい人たちの読みものとして、或、人間的交渉の叙述に、止むなき手加減を加えた」と省いた、伊邪那岐神と伊邪那美神の国生みの経緯までも記している。

とはいえ、「林古事記物語」は『古事記』をそのまま通釈しているわけではない。例えば、『古事記』が、

故、其の神避れる伊邪那美神は、出雲国と伯伎国との堺の比婆之山に葬りき。

と記す「神避り」を、次節の「黄泉の国」の冒頭に移すことで、世界の區別を明確に示している。その反面、

そして、十つかのつるぎという、長いつるぎをひきぬいて、火の神カグツツの首を、ただ一打ちに切り落としてしまった。

と閉じた「国うみ」の末尾は、その意図を明らかにしないままとなっている。残される疑問を、課題とすることを躊躇わない。読者に検討の余地を残す叙述が方法として選択されている。

三、「黄泉の国」から「八またのおろち」まで

「国生み」に続く「黄泉の国」は、

さて、イザナミの女神のなきがらは、出雲の国と伯耆の国のさかいにある比婆の山にほうむられたが、女神はそこから、死んだ人の集まる黄泉の国というまっ暗な地底の国へ行ってしまった。

と記されはじめる。「死んだ人の集まる」「地底の国」との加筆に、既述

した「林古事記物語」の特徴と理解を読むことができる。

『古事記』が、

是に其の妹伊邪那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき。爾くして、殿より戸を騰ちて出で向かへし時に、

と記す箇所を、「鈴木古事記物語」は、

すると、そこへ、夫の神が、はる／＼たづねてお出でになつたので、女神は急いで戸口へお出迎へになりました。

と解す。しかし「林古事記物語」は、戸を閉じたままでは迎えられないと考えたのか、「戸を開けて出迎えた」と、独自の判断を加えている。

『古事記』が、

其の石の中に置きて、各対き立ちて、事戸を度す時に、

と記す「事戸を度す」を、「鈴木三重吉物語」が「恨めしさうに岩を睨みながら」と曖昧に記すと、「林古事記物語」は、

その岩を中にはさんで、「もう夫婦の縁はこれかぎりきつてしまふ。」

と宣言した。

と、夫婦の契りを解消する呪言を発するとの理解を示す。

「阿波岐原のみそぎ」では、『古事記』が、

次に、月読命に詔りたまひしく、「汝が命は、夜の食国を知らせ。」

と、事依しき。

と記す中の会話を、神名からか「そなたは、月の世界をおさめよ」と表現している。続く「天の岩戸」では、「夜の食国」を、

さて、アマテラスオオミカミとツクヨミノミコトは、父神の命令のとおり、それぞれ大空と夜の国をおさめた

のように、「夜の国」であると位置づける。理解は個々に検討する余地を残すが、積極的な解釈が記されている。

『古事記』が、「スサノオノミコト」の望む先を

「僕は、妣の国の根之堅州国に罷らむと欲ふが故に、故く」とまをしき。

と、「根の堅州国」であると記すところを、「林古事記物語」は、

「わたくしは、おかあさんのいる黄泉の国へ行きたいのでこんなに泣いているのです。」

と、「黄泉の国」と記す。「おかあさん」を「イザナミノカミ」と捉えてのことと考えられる。

二節の「山幸海幸」に、『日本書紀』が記す表現を用いていることを述べたが、「八またのおろち」でも、『古事記』が、

僕が名は足上名椎と謂ひ、妻の名は手上名椎と謂ひ、女の名は櫛名田比売と謂ふ。

と記す娘の名を、「クシイナダヒメ」と記していることが留意される。

『日本書紀』第七段正文が「奇稲田姫」と記し、一書第二が「奇稲田媛」と記す。

前掲した喜田『日本歴史物語(上)』は、「八岐の大蛇退治」に「奇稲田姫」と記す。大木『日本神話』も、「奇稲田姫」と記す。既述したように、『日本書紀』を念頭に置いた再話の可能性が認められる。

同話は、前掲した第四期国定国語教科書「小学国語読本巻五」(一九三五・昭和十年)に「八岐のをろち」と題され、第五期国定国語教科書「初等科国語一」(一九四七・昭和十七年)にも「八岐のをろち」と題して掲載されているが、いずれも娘の名を記してはいない。東京書籍刊行の『尋常小学校 国語読本 巻五』(一九三一(昭和六年))にも「大蛇たいぢ」と題して掲載されているが、娘の名は記されない(15)。

大木『日本神話 いなばの白うさぎ』は、「櫛名田姫」に変更している。前節の「海幸山幸」と同様に、神名を『古事記』の内容に合わせる傾向を示している。「林古事記物語」は、これより後に刊行されている。『日本

書紀」の「クシイナダヒメ」のまま記されているところに特徴が認められる。

四、「オオクニヌシノカミ」から「神武東征」まで

『古事記』は、大国主神に、

大国主神。亦の名は、大穴牟遲神と謂ひ、亦の名は葦原色許男神と謂ひ、亦の名は、八千矛神と謂ひ、亦の名は、宇都志国玉神と謂ひ、并せて五つの名有り。

と、五つの名があることを記し、

故、此の大国主神の兄弟は、八十神坐しき。然れども、皆、国をば大国主神に避りき。避りし所以は、其の八十神、各稲羽の八上比売に婚はむと欲ふ心有りて、共に稲羽に行きし時に、大穴牟遲神に袋を負せ、従者と為て、率て往きき。

と、物語の展開に応じて使い分けている。「林古事記物語」は、見出しに用いた「オオクニヌシノカミ」で統一する。大きな袋を背負わされている姿を、「八十神たち」が「下男のかわりにしてつれて行った」と説明している。

ここでは、『古事記』がうさぎの騙す相手を「和迹」と記す箇所を、「林古事記物語」が「ワニザメ」と解しているところに着目したい。

参考までに、前掲した大木『日本神話 いなばの白うさぎ』は、「わに」と訳し、挿絵にも鰐が描かれている。遡って同大木『日本神話』も「鰐」と記している。「鈴木古事記物語」も「鰐」と記す。明治時代に刊行されたちりめん本「The Hare of Inaba」(一八八六・明治十九年)(16)にも、「crocodiles」と記され、挿絵にも鰐が描かれている。本居宣長の『古事記伝』十之卷(17)にも、

和邇、和名抄に「麻果が切韻に云く、鰐は鱉に似て四足有、喙の長三

尺甚齒利とし、虎及び大鹿水を渡れば、鰐之を撃ち皆中断す」と、和仁と云り。此魚の事、古書に多く見ゆ。(以下略)

と、鰐が想定されている。「林古事記物語」が「ワニザメ」と訳するのは、特異な例と捉えることができよう。

こうした中で、本稿が引用した文献の中では、喜田『日本歴史物語(上)』が、「わに」に傍点を記し、

こゝにわにと申すのは、鰐鯨という鱧の類の大鱈で、今いう熱帯地方の鰐の事ではありません。

と記しているのが早い。大木『日本神話 いなばの白うさぎ』(一九五一・昭和二十六年)は「わに」と記すが、大木『いなばの白兔』(一九五四・昭和二十九年)は、「わにぎめ」(18)に変更されている。「林古事記物語」は、この後に出版された作品となる。

時間的に、大木『いなばの白兔』からの影響も考えられなくはないが、『日本歴史物語(上)』とは「クシイナダヒメ」の使用まで一致している。「林古事記物語」が『日本歴史物語(上)』を参照している可能性を考える方が穏やかなように思われる。『日本歴史物語(上)』が、『日本書紀』を念頭に再話していた内容を、「林古事記物語」が、『古事記』の再話に取り込んでいることになる。

『古事記』と『日本書紀』を区別しない再話には、大正期の在り方が想起される。前掲の「解説」には、

今から三十年ほどまえ、わたしがまだ中学生であったころ、鈴木三重吉氏が有名な「古事記物語」を書きあげた。

と記されている。ただし、当時の読書体験としてまでは記されていない。「鈴木古事記物語」以後に刊行された『海幸山幸』には、『古事記』と『日本書紀』の区別が認められなかった。未分化を疑問に感じていなければ、『古事記』に『日本書紀』の内容を持ち込み得たのであろう(19)。時代

を後退させるような現象が存在することも考えておくべきであろう。それはすべての理解が後退することを意味しない。『日本歴史物語(上)』が記す「ワニザメ」との解釈が、『古事記』の新しい理解として取り込まれている。再話が、作者の理解と解釈に大きく左右されながら進められていることに鑑みると、作品の一つ一つの在り方を個別に尋ねてみることで求められる(20)。

話を本文の考察に戻そう。「いじのわるい」と加筆される八十神たちは、「ヤガミヒメ」が結婚の相手を選ぶオオクニヌシノカミを殺すのだが、助ける母の神が、「スサノオノミコトのいる根のかたす国へ行くのがよい。」と話す。内容は『古事記』のままなのだが、前掲の「根のかたす国」は「黄泉の国」へと置き換えられていた。「おかあさん」を「イザナミノカミ」と解して、「根のかたす国」を「黄泉の国」と記したのであろうと述べたが、物語として、「スサノオノミコト」が「根のかたす国」へ行くことまでを否定しない。

「鈴木古事記物語」に比べると、「林古事記物語」の文章は簡潔なのだが、「へびがかみつこうとしたら」「ぐっすりと寝て」「びっくりしてしまつた」等、短い修飾句を利用して、臨場感豊かに表現されているところは、物語全体に一貫して認められる。

『古事記』が、
波の穂より天の羅摩船に乗りて、鵝の皮を内剥に剥ぎて衣服に為て、
帰り来る神有りき。
と表す内容を、

(前略)はるか沖の波間から、ひとりの小さな神が、小さな舟に乗ってあらわれた。その舟はががいもという木の実のさやで、着ているきものは火取虫の羽でつくってあった。

と記す。「海を光して依り来る神ありき。」と記される神名を、『古事記』

は記さないが、「オオトシノカミ」と記していることが留意される。「鈴木古事記物語」にも、同様の記述が認められる。「林古事記物語」は八千矛神が沼河比売を娶る話を省いているのだが、「鈴木古事記物語」が先にそれをしている。「高天の原の使者」においても、雉の使者を「ナナキメ」と記すのは、「鈴木古事記物語」が「名鳴女」と表現している。黄泉の国に「悪いにおいがたちこめていた」と記すのは、「鈴木古事記物語」が「イザナミノカミ」を、

さうすると、御殿の一ばん奥に、女神は寝て入らつしやいました。そのお姿を灯で御覧になりますと、お体中は、もうすつかりべとぐに腐りくづれてゐて、臭い／＼いやな臭ひがふん／＼と鼻へ来ました。と記していることが留意される。「イザナギノカミ」を追いかける者たちを「鬼」と表現しているのも、「鈴木古事記物語」の使用が早い。「天若日子」を「ワカヒコ」と略称するのも「鈴木古事記物語」に「若日子」と記されているところに類似点を見出すことができる。「林古事記物語」は自らの表現で記すことを目指してはいるが、「鈴木古事記物語」を参考にしているとと思われる箇所も散見される。再話のモデルにしているのである。

『古事記』上巻は神倭伊波礼毘古命の誕生で閉じられているが、「林古事記物語」は「神武東征」までを、

ナガスネヒコを攻めほろぼすと、ほかの悪神たちも、つぎつぎに降伏し、降伏せぬ者は、うちほろぼされて、天下は、平和になったので、イワレヒコノミコトは、大和の橿原の宮で天皇の位についた。これが、われわれのさいしよの天皇、神武天皇である。

と記し閉じている。神話として終わるのではなく、天皇を中心とする歴史に連なっているところまでを示す。『古事記』を(歴史)と捉えるので、喜田『日本歴史物語(上)』が参照されているのであろう。

おわりに

戦後十年を経て、日本の少年少女のための読書が見直されてゆく中に、世界文学全集が編まれてゆく。『世界少年少女文学全集』に収められた「林古事記物語」には、時代に応じた『古事記』の再話が求められていた。

先行する「鈴木三重吉物語」を優れた作品と認めながらも、「鈴木三重吉物語」が用いた敬語体は避け、わかりやすい表現と詳しい解説を省いた。紙面に限りのあることが考慮される。代わりに、『古事記』の神話表現を最小限の修飾句を加えて利用する記述が心がけられていた。わかりにくい表現は曖昧に記すのではなく、明確な解釈を与え、世界観に基づいた物語が展開されていた。生じる疑問は、課題とするままに記し留めている。

「鈴木古事記物語」と大きく異なるのは、題名に『古事記』を冠しながら、再話に『日本書紀』の内容を持ち込んでいるところである。『海幸山幸』と題する再話は、大正期に『古事記』も『日本書紀』も区別なく行われていたが、昭和期に入ると区別される傾向がうかがわれた。それより後の再話になるのだが、「林古事記物語」には混在が認められる。『日本書紀』が用いる語句の使用は「八またのおろち」の「クシイナダヒメ」にも認められる。他に、「オオクニヌシノカミ」では、「ワニ」を鰐と解する作品が多い中で、「ワニザメ」と記すことが注目される。いずれも喜田『日本歴史物語(上)』の内容と一致することが重視された。『日本歴史物語(上)』は、書名にも記されるように〈歴史〉を記すことを目的としている。『日本書紀』を優先した再話が展開されている。これを『古事記』の再話に持ち込んでいるのが「林古事記物語」となる。『古事記』の内容に『日本書紀』の内容を持ち込み得るのは、作者の大正期に得た神話理解が影響する可能性を指摘した。それは単なる大正期へのフィードバックでは

なく、昭和の新しい解釈を積極的に加味しているところに、一九五〇年代の再話作品としての特徴が認められる。

「林古事記物語」は、初代神武天皇が都を開くところまでを記し、神話が〈歴史〉につながることを示している。作者の神話理解が、喜田『日本歴史物語(上)』の内容を呼び込む結果になったと見通す(21)。

注

(1) 勝尾金弥「こどもの本の歴史」(日本こどもの本研究会編『こどもの本と読書の事典』一九八三年 岩崎書店)には、

戦後相次いで創刊されたいわゆる良心的児童雑誌は、数年のうちにマンガ中心の大衆紙に駆逐されてしまった。

そのような状況の中で、高く評価されたのは、一九五〇年創刊の《岩波少年文庫》と一九五三年創刊の創元社《世界少年少女祖文学全集》であった。

とある。宍戸寛「世界少年少女文学全集」(『児童文学事典』一九八九月刊 東京書籍)は、「再話、翻案もので終始した叢書が多いこの時期に、その規模とともに翻訳は高い評価を受けた。だが、長編は抄訳を余儀なくされた。」と記す。

(2) 佐藤宗子「少年少女の時代―戦後における「教養形成」の対象」『千葉大学教育学部研究紀要』第五七卷 二〇〇九年三月。「指導される「教養」―二つの少年少女向け世界文学全集にみる「文学」の役割」(『千葉大学教育学部研究紀要』第五八卷 二〇一〇年三月)は、

創元社版は、戦後民主主義の啓蒙という枠組みのなかで、一般の読者全体に対して文学作品群を「教養」形成に資するものとして提供し、彼らそれぞれの内的成熟を記念している。

と述べる。

- (3) 林房雄（一九〇三〔明治三六〕—一九七五年〔昭和五〇〕）は、プロレタリア児童文学の先駆者として知られる。『文芸戦線』『小さい同士』に執筆。戦後、文筆家として公職を追放される時期を経て、一九五〇年に『息子の青春』（六興出版社）を刊行。本稿が取り上げた「古事記物語」は、その後の執筆となる。
- (4) 本稿では、鈴木三重吉『古事記物語上巻』赤い鳥の本第一冊（一九二〇年〔大正九〕十一月 赤い鳥社）をテキストにしている。ここでは「序」を引用した。
- (5) 鈴木三重吉の『古事記物語』上の「序」も、「私はこの物語りを、一種の芸術作品として、少年少女諸君へと共に、私のすべての読者諸君に捧げる。」と書き起こしている。「少年少女」を対象に書いていることはもちろんのだが、それ以上の年齢も対象とする可能性を示唆する。
- (6) 市瀬 a 「小学校国語教育に求められる『伝統的な言語文化』としての児童文学——教科書に掲載された『いなばの白うさぎ』を一例として——」『梅花女子大学教職研究』六二〇二二年四月。中学校の国語教育に求められる「伝統的な言語文化」の学習については、市瀬 b 「中学校国語教育における和歌学習の可能性——教科書に掲載された万葉歌の読解を考える——」『梅花女子大学教職研究』三二〇一八年三月を参照。
- (7) 例えば、前掲注（6）の市瀬 a がとりあげた、「舟崎克彦文・赤羽末吉絵『いなばのしろうさぎ』（日本の神話第四巻 あかね書房 一九九五年〔平成七〕一〇月）は、古典文学の読解へと結びつく作品といえる。これに対し、「谷真介文・赤坂三好絵『いなばの白ウサギ』（十二支むかしむかしシリーズ 佼成出版 二〇〇六年〔平成一八〕一〇月）は、作者の創意によって押し広げられた神話世界が形
- 成されている。児童文学に再話された日本の神話は、等し並みに列挙されるのではなく、特徴に応じた整理を要する。
- (8) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳 新編 日本古典文学全集『日本書紀①』（一九九四年四月 小学館）をテキストに用いている。
- (9) 巖谷小波編 模範童話文庫2『海幸山幸』（「凡例」には、選録の実務は木村小舟が行い、室野素月が挿絵を担当したと記されている）文武堂 一九二六（大正十五）年八月。これより早い例は、巖谷小波編『学校／家庭 教訓お伽噺（東洋之部）』（博文館 一九二二年〔明治四十五〕六月）の中に「海幸山幸」を見つけることができる。「山幸彦」「海幸彦」とのみ記し、神名を記していない。
- (10) 喜田貞吉 日本児童文庫『日本歴史物語（上）』アルス 一九二八年〔昭和三〕四月。
- (11) 大木雄二（一八九五〔明治二十八〕—一九六三年〔昭和三十八〕）『日本神話』金の星社 一九三八年〔昭和一三〕十月。
- (12) 大木雄二 世界名作童話全集第三二巻『日本神話 いなばの白うさぎ』講談社 一九五一年〔昭和二六〕十二月。
- (13) 本稿では、新編日本古典文学全集 山口佳紀 神野志隆光 校注・訳者『古事記』（一九九七年 小学館）をテキストに用いている。再話と比較しやすいように訓読文を使用した。
- (14) 神話表現のすべてが優先されているわけではない。例えば、「海幸山幸」では、『古事記』が「火遠理命」を、
爾に豊玉毘売命、奇しと思ひて、出で見て、乃ち見感でて、目合して、其の父に白ししく、「吾が門に麗しき人有り。」とまをしき。爾に海神、自ら出で見て、「此の人は、天津日高の御子、虚空津日高ぞ。」と云ひて、即ち内に率て入りて（以下略）、

と、呼び分けているところを、「この人は、とうとい天神のみ子だ」と解いて、わかりやすさが優先されている。

- (15) 一九一九年〔大正八〕八月〔大阪書籍〕『尋常小学校 国語読本 巻五』から同じ傾向が認められる。

- (16) ジェームス夫人訳「The Hare of Inaba」(英語版) 一八八六年〔明治十九〕弘文社。

- (17) 本居宣長『古事記伝』第十之卷(『本居宣長全集』第九卷 昭和四十二年七月 筑摩書房)。

- (18) 鴨下晁湖絵 大木雄二文『いなばの白兔』(講談社の繪本 大日本雄弁会講談社 一九五四〔昭和二十九〕年八月)。

- (19) 前掲(9) 書『学校／家庭 教訓お伽噺(東洋之部)』(一九一二年〔明治四十五〕)は、「八岐の大蛇」に「榊稲田姫」と記している。巖谷小波編著作品が、早くから日本の神話を再話し、普及させている影響が大きい。

- (20) 前掲注(7)に記した、舟崎克彦文・赤羽末吉絵「いなばのしろうさぎ」が、「ワニ」の解釈に疑問を示して、「ワニザメ」と解し、挿絵にサメを描いている。以前の同話作品を参考にした様子はいかがわれない。

- (21) 前掲注(12)書の末尾に記された「『いなばの白うさぎ』については、『古事記』を《伝承説話》と捉えて、

(前略) たどりついたところは、おおらかな、素朴な人間世界であり、ヒューマニズムのみちた理想社会であったように思えます。ただ、作品の一つ一つが、わたしのこの言葉を証拠だてることができたかどうかは、むしろわたしのほうで教えていた

と記している。同時代に再話された作品であっても、『古事記』を

《歴史》として読んでいた「林古事記物語」とは異なる視点が示されている。複眼的な視点の存在することが留意される。

(前略) 文章は極めて読みにくく、難解なところがすくなくありません。これがのちのちまで「古事記」について、国学者のあいだに、さまざまな議論と研究が行われたゆえんでもありません。

しかし、わたしはそういうことにこだわりなく、この本を書くことができました。一字一句については、あまりむずかしく考える必要がなかったからであります。わたしは書かれた事実と、その精神をつかむことに専念しました。そして、わたしなりにつかんだと考えることができたからです。

と記す内容は、作者の神話理解が再話に優先されている様子を示唆する。

ギリシア神話などにも、「古事記」と共通する面が多々あるように思われるのです。人間の考えのおよばないこと、力たりないところは、神のあらわれによって解決づけられています。これは「神」が、当時の人たちの理想であり、夢であったからではないでしょうか。しかも、いずれも神とよばれながら、日本の神と、外国の神とのあいだには、変わったところもありません。そういうことも、皆さんによく考えていただきたいです。

との記述からは、世界の文学の中で、日本の神話を考える視野が開かれているところに、時代の特徴を捉えることができよう。

※本稿の着想は、「絵本『いなばの白ウサギ』の謎」『開いてみよう古典の小箱』(勉誠出版刊 二〇〇四年七月)にはじまる。今回は、その一部を述べたものである。